

登山・登攀の記録

北アルプス 劔岳八ツ峰 I 峰Ⅲ稜～八ツ峰主稜～劔岳～別山尾根

日時:2003年5月3日～5月4日

メンバー:中村琢磨、新谷岳史

概要:劔岳の八峰…どこから見ても険しくそそり立つ劔岳の派手なこぎり尾根。先人たちが数多くのルートを開いた岩壁。クライミングを少々かじった私でも、劔にはなにか尋常でない妖力を感じる。ところが中村は2回生時の放浪もあって、4回生になるまで劔岳本峰を踏んだことがないという情けない状況にあった。在学中に一度だけでも取り組まなくてはならない山だと思っていたところ、この5月合宿で八峰に行くことが決まった。私なりに楽しみにしていたし、同時に不安でもあった。ろくにトレーニングもしてないくせに果たして行けるのだろうか。結果的には、晴天に恵まれ、怪我もなく実質2日で黒部ダムから室堂に抜けた。楽しかったといえばそれまでだが、よくよく考えればかなり荒い行動で脳天気な駆け上がったという印象もぬぐえない。こんなへたれパーティでも無事に登らせてくれた劔岳に深く感謝したい。

記録

5月3日 晴

黒部ダム(7:10)－ハシゴ谷乗越(10:15)－取り付き(11:00)－P5(13:30)－P6手前(16:45)

例年になく人が多い。内蔵助平隊(中西、加藤、渡辺、前川OG、牛田顧問)を残し、新谷と二人で黒部川を下る。雪が少なめだ。空はどこまでも青く、左手に丸山東壁が雄雄しくそびえる。内蔵助平に入る。まるで夏のように汗が吹き出る。このときは八ツ峰主稜を時間内に登りきれぬのかという不安があったため、あまり休みたくなかった。ハシゴ谷乗越に着くとIV稜とⅢ稜が見える。IV稜基部も雪がかなり融けてしまって、ブッシュがめんどくさそうだ。協議した結果、IV稜は難しそうなのでⅢ稜に変更することになった。劔沢から直接滑り台ルンゼを登りつめてP3へと出る。P3P4と雪が少なく、おおかた岩稜をハイマツにつかまりながら登る。P5の岩稜を越えるとP6への切れ落ちた痩せ尾根がそびえていた。雪はだいぶ落ちてしまい、岩の細かいリッジとなっている。IV稜側にトラバースするとブッシュに捕まりながら上の雪面に登れそうだったが、トラバースも結構面倒くさそう。結局、中村リードで岩稜を直登する。取り付くとそれほど急傾斜でもなく、ツェッケを細かいホールドに乗せて上がった。その後は急斜面のやぶごぎを経て、雪面にでる。あとは陽光で腐った雪壁をひたすら上り詰めて、P6手前の雪稜上に幕営する。

5月4日 晴

出発(4:50)－I峰(5:30)－VVIノコル(7:30)－本峰(11:10)－室堂(15:30)

よくしまった雪をアイゼンを効かせながら雪壁を登り、I峰にでる。II峰は長治郎谷側をトラバースし、Ⅲ峰は直登。ザイルを一応出し、懸垂下降をする。懸垂下降でV・VIのノコルに到着する。雪もしまっているの、ノーザイルでVI峰の雪壁を登り、途中で右にトラバースしてVII峰に到着。細く切れ落ちた真っ白な雪稜と深い青空がすばらしい。雪稜は概して安定しており、ザイルを出す必要のある場所はそれほど多くない。予想していたより遙かに速いペースで進む。あまりに安易すぎていさか拍子抜けしてしまうが。池ノ谷乗越から北方稜線をたどり、本峰にたどり着いた。下山路はトレースが階段状に付いており問題なく降りられる。カニのたてばいではザイルをだすパーティもいたが、我々は鎖にシュリングを通すだけで通過した。途中、中村は明日の公務員試験を受けるために下山し、新谷は雷鳥沢でもう一泊した。

(記／中村)